

# トランジット

大村伸一

1

駅は夢読樹の森によって入念に隠されていた。木々は分厚い葉肉を互いに重ねあわせ、太陽の光がこの森の内部へ侵入しないように護っていた。手抜かりのあった枝から不幸な光が森へ踊りこむと、夢読樹は鍛えられた葉さばきでそれを叩き落とす。光はうめき声をあげながらそれで容易に死んでしまうのだ。

森は正確に測量された間隔で並ぶ街燈の擦り切れた灯によって映し出されていた。列車がこの森に入ってから窓越しに見えるその灯の単調な流れをみつめていて、Sはしばらく寝入ってしまったらしい。終着駅はまだまだずっと先だ。眠り過ぎなかったのは幸運といえた。

Sは駅を出るとその場所から足を踏み出すことができなくなった。森には道が見当たらなかった。駅は森に閉じ込められているのだ。Sは構内に戻り、駅員を探した。望み通り灰色の顔をした上級駅員がめざましい速さでSの傍らを駆け抜けて行った。声をかける隙さえなかった。巻き上げられた土埃がSの髪や肩トランクの上に舞い積もった。埃をはらい、自動販売機の陰に隠れていると、少し離れた通路から別の駅員が疾走してくるのが見えた。Sは身構え最も接近した時を見計らって相手の腰に飛びついていった。二人はからみあって倒れた。Sは口の真正面に配置された駅員の耳に向かって、町へ行くにはどの方向へ行けばよいのかと怒鳴った。少し先端のところがその耳は、ひくつきながら、どの方向へ行こうと町へ出られますと答えた。それが駅員の最後の言葉だった。首の骨が折れていたのだ。

Sが死体から離れ駅を出ると夢読樹の葉はおびえるようにぎわめき道をあけた。噂がひろまっているというのだろうか。その道を辿ってSは森を見下ろす小高い丘に出た。トランクを足許に置き、町を詳細に観察したが、要所要所に枝が伸び一目で見渡せないように森が邪魔をしていた。

町はこの丘から海に続くゆるやかな斜面に平たく貼付いている。町全体が、この丘からの海の眺めを妨げないように身を伏せているのだ。だから海はみごとに全貌を見渡すことができたが、水平線は不鮮明でどこまでが海でどこからが空なのか判別することは難しかった。

大気は十分に乾燥しており、目に映るすべてのものは背景から切り取られたかのように輪郭が際だっていた。限りない青空の中央で、太陽は無邪気に強力な光線を放ち、計量不可能な程の熱量を町に投げ与えていた。熱によってゆらぎはじめた大気の中、町の上空には半透明の解釈虫が数えきれない程浮かび、ゆらめいていた。

## 2

Sは午後も早く町に到着したので、気に入ったホテルに泊まることができるだろうと思っていた。だが、町にホテルと名のつくものはホテル光以外ありはしない。Sは町の視察官のようにありとあらゆる通りをホテルを求めて探し回ったが、彼のような大男を収容できるホテルが光以外存在しないことを認めるまで、腕時計の針を止めておかななくてはならなかった。野宿をしようとは思わなかったからだ。

それから彼は疲れきった体をホテル光のフロントへ運んだ。

## 3

ボーイは冷たい感情を持った柔らかな少年だった。Sはチップを受け取ったボーイの腕をつかんで、開け放たれた窓から思慮の無い雲などひとつもない青空に向けて放り出した。ボーイは不思議そうな表情をしながら落ちて行った。あなたは実に勇敢な方だ、とも言った。

Sは誇らしげに部屋のドアを振り返ったが、そこにはすでに新しいボーイが待っていた。

監視されているのに違い無い。Sは新しいボーイに二三の希望と調査を依頼して、追いついた。

## 4

部屋には機能というものが欠けていて、いくつかの家具は使われることなど予想していなかったかのように作られていた。Sはそういった家具のひとつひとつに、自らの存在の目的と方法を教えなくてはならず、家具はおおむね反抗的だったので、説得には夜半までかかった。成果は古い椅子が一脚だけで、彼はそれをきしませながら眠らなくてはならなかった。

--こういった部屋で死を迎えねばならないとしたら、死には私がどういったふうに見えるだろう。勿論『S』などといった曲がりくねった文字などではないはずだ。そうだ。死に瀕したこの部屋の私は疑いもなくこの部屋の最後の家具にしか見えないだろう。

--あなたは、異国風の期待をこの部屋に抱かれておいですね。

気付かぬうちに入ってきたホテルの支配人が、不意に口をはさんだ。Sは耳を赤く染めながらも平然とした口調で答えた。

--こういった罪のない空想すら期待と呼べるならばの話ですが。

--この町では、すべての空想が気体となります。想像力が過熱するのです。

Sはしばらく沈黙したあとで、話題を変えた。

--この町では、天文学はほとんど研究されていないようですね。先程、町のはずれの山頂でみかけた気象台には、擬似ねずみの死体が一つきりしかおかれていませんでした。

支配人はそれこそ自分の一番言いたかったことだとでもいうように、自信を持って答えた。

--実は、何十年も以前に気象台は活動を停止してしまったのです。予想されるべき天候というものが、ある事件以来消失してしまったものですから。それ以来あそこは死体腐乱場として用いられています。市長は死者に対して寛大なのです。

最後の言葉は支配人の残像が語ったのである。支配人のいなくなった場所には、ナフタリンの香りが残されていた。

## 5

Sは窓から表通りへ出、レストランを捜した。ホテルの内部はこの町特有の複雑な構造になっていて、案内もなしにフロントに辿り着くことなど不可能に思えたからだ。

もう少し若くて勇気があれば、このホテルのからくりを徹底的に調べ上げるのだがと、Sは思った。

## 6

表通りには一面道草が茂り、Sは足をからませて、幾度も草の上に転倒した。それでも汗みどろになってレストランに到着した。意志の力が常に勝利をおさめるのだと思えた。

## 7

レストラン魯鈍には絶え間無く季節風が吹き込み、天井からぶら下げられた幾つものトランペットを鳴らしていた。管の中を通り過ぎた風は赤やオレンジに輝き、室内の照明もかねている。

音楽にあわせて、町の歌い手が歌をうたう。

あなたの胸は年老いていませんか？

わたしの旅は準備なく始まり

そして 成果なく終わるでしょう

街角には似合いの花屋もありません

あなたの顔は凍りついていませんか？

あなたの指は溶けかけてはいませんか？  
太陽に かわいた猫はころがり  
鳥も燃えつきて落ちてくるでしょう  
夜道では多くの子供が死んでゆきます  
あなたの瞳はひからびてはいませんか？

この町に来たのが間違いでしょうか？  
暗い夜に  
誰もが親切で  
誰もが口喧しい  
この町に来たのが間違いでしょうか？

あなたの愛はうつむいてはいませんか？  
約束の場所はいつも暗がり  
言葉さえ見失うでしょう  
恋人たちは早口で別れようとしています  
あなたの額は裏切りを刻んではいませんか？

古い道には灯さえなく  
新しい道では子供たちが笑います  
太陽はあまりにも若く  
月はすべてを縛りつけているから

この町に来たのが間違いでしょうか  
暗い夜に  
誰もが親切で  
誰もが口喧しい  
この町に来たのが間違いでしょうか

歌は物悲しい気分を掻き立て、床に眠っていた犬の瞳を涙で曇らせさえた。客はいずれも俯き、肩を震わせていたが、ぎこちない手つきで食事を口に運ぶことは忘れず、歌に合わせて食器の音をたてる。

歌い手たちは足が悪く、胸に猫をかかえている。彼等の歌声の合間に、猫は低く鳴き声をあげる。それはリズムを明確にし、悲しみを増幅する。

積虫が泳いでいた。

--一息で飲むのが礼儀というものです。

とそばの子供が話し掛けてきた。子供は額に角があったが、その他の容貌はおおむね美しく、傍に母親がいなければ、おそらく天使と見分けがつかなかっただろう。のちに、母親とはぐれたこの子供に出会った時、この子の頭上には確かに光の輪が輝いていたのだ。Sは料理を口に頬張りながらうなづいた。

--習慣というものが社会を形成するのです。

## 9

テーブルの花瓶には夢読樹が生けられていた。この植物の森が、町の一方を包み込んでいる。残りは海に面している。その森の中から、ときおり幾組もの恋人たちがふらふらとさまよい出てくる。何かが森の中に隠されているのだ。

## 10

帰りに近くの食料品店へ行き、カメラと雑誌を手に入れた。

--このカメラは使い物にはならないでしょう。この町では大気が粗雑すぎるのです。

品物を渡しながら店主が言った。

--それでは何故、カメラを置いているのですか。

店主は一瞬この問いにたじろいだが、思い返してほくそえみながら応酬した。

--そのような問いを発してはなりません。あなたの語る言葉は、どんな些細なものであれ、嚴重に監視されているのですから。

Sは、誤解が、それも極めて質の悪い誤解が、この町と自分の間にあることに気付いた。

## 11

光の自分の部屋には明け方に辿り着いた。そのとき初めて気がついたのだが、その部屋には同室者がいたのだ。男は親しげな笑みを浮かべて、名前はトポといい、Sの古くからの親友であると断言した。Sは、私はあなたのように立派な親友があったなんて今まで知りませんでしたと答えたが、寝室へ向かいながらこう付け加えた。私の古くからの親友なら、私が早朝から眠りにつく習慣だということは御存知でしょう。おやすみ。

トポは、そういった習慣はあまりにもあなた自身に密着しすぎているから、自分のように古くからの親友にはかえって気付かれないことが多いのだと弁明し、知らなかったと打ち明けた。

## 1 2

Sは日の暮れかかる少し前に醒めた。窓の向こうの朗らかな青空に、どうしてもみつめることのできない部分があった。解釈虫さえ寄り付こうとしなかった。それはたぶん無というものだ、とSは思った。そしてルームサービスのコーヒーをポット一杯飲み干したとき、この無が昨日のやわらかなボーイの精神そのものであることに気付いた。やわらかなボーイは、死と青空との闘いを開始したのだ。彼は確実に勝利をおさめていくことだろう。

## 1 3

--旅人とは、旅によってしか愛を知ることのできない者のことです。彼等は故郷からの距離によって愛を測るのです。残してきた両親や妻や子供たちを、彼は旅によって愛するのです。

トポはつつましく両手を膝に添えてそう語った。

--しかし（と、支配人はトポに反論の姿勢を示す）おそらくこの地上に旅人などという者はただの一人もいはいはしないのですよ。

トポは頬を赤らめて何か言い返そうとするのだが、支配人は話しかけられることを怖れて朝刊で顔を隠してしまう。

--愛が重要なのは、それが反論しえないからなのです。

--それでは、あなたは受話器を愛せますか。

--いえ。あれは磁気を持っている・・・。

--この町には定着した言葉がないのです。嘘を語るものが日常です。

## 1 4

新しいボーイは生臭い息をSの耳許に吹きかけた。

海岸では死にかけた覚醒魚が無数に打ち捨てられていたが、ボーイたちはそれを主食にしている。陸に上げられた舟の陰や中で、彼等は人目を忍んで魚の内臓をむさぼる。漁師たちは四六時中彼等を追い立てなくてはならない。海岸は喧噪にみちている。

新しいボーイは重要な情報をSにもたらしたのだ。Sは報告を聞き終わると、新しいボーイのこめかみに平手打ちを加え、下腹に膝蹴りを埋めて、誰にも口外しないことを約束させた。

トポによって占拠された忌まわしい机の上にはどこのものかも分からない地図が山積みになっている。

トポは新しい地図を買い求めるために町中を駆け回っている。新しい地図が手に入ると、彼は部屋に戻り、二三本の線と注意事項を書き込み、机の山の頂上あたりに放り上げ、再び身を翻して町へ出て行く。

彼はこの町では顔がきくののだという。目新しい地図が出るたび、トポのところへ通知が舞い込む。しかし、手紙が届くのはいつもトポ自身によってその地図が買い取られてしまった後になる。

Sは何度かその地図を覗いてみたが、そこには何も連想することのできないインクの斑点が描かれているだけだった。

トポに強引に誘われてSは山へ登った。

--この町に隣接する火山に一度登った者はもう二度とこの山のことを忘れることができなくなります。おそらく、自由と絶望とがその山道によってなぞられているからなのでしょう。

とトポは頬を紅潮させて語る。

山は木々が深く、未知の鳥類の声があやしく響いていたが、思いの外道程は短く、山頂へは一度も休まずに着いた。

山頂では气象台がその白い壁に、大気中に充満する光線をねじりあわせ、彼等の目を狙って反射させた。

二人は目から煙りをあげながら、その建物の中に駆け込んだ。他に逃げ道はなかったのだ。

--君たちは新しい助手かね。

声をかけたのは年老いた擬似ねずみだったが、視力のないものには分からなかった。Sとトポはその問いを否定すると、この气象台を見学に来た旅行者だと主張した。擬似ねずみは、市長の奴め、いくらいつてやっても新しい助手をよこさない。こんな状態で何か新しい重要な仕事がすすめられると思っておるのか。とひとしきりわめいていたが、気を取り直すと二人にここは气象台ではなく天文台であると指摘した。彼はこの天文台の台長であり、町の唯一の科学者であると、言う。それから、この天文台の目的と設備などについて説明を始めたが、その口調には明らかに深い不満の調子が含まれていた。

--あなたは、この天文台に不満をお持ちなのですね。

トポが同情をこめて尋ねると、台長は待ち受けたように話し始めた。

--そのとおり。こんな環境でいったいどれだけ重要な仕事ができるというのか。わたしには無尽蔵のアイデアがあるだ。こんなところにおいては、そのアイデア

のどれ一つとして実現することはできんだろう。

涙をうかべていたのは、彼が優秀な研究者でもあったからだ。

17

Sとトポは市長から招待をうけた。

--あなた方は、この町では誰もが親切で、誰もが口喧しいという歌を聞かれたことがおありでしょう。それは事実なのです。あなた方についても、口喧しく騒ぎ立てる者がおりまして。お気を悪くなさらないでいただきたい。私も義務として、二三お尋ねしなくてはならないのです。快くお答えいただけるものと思います。

丸く肉付のいい顔をてらてらと輝かせながら、市長は弾みをつけて二人と握手した後そう言った。二人は別に隠さなければならないような秘密はないと、答えた。

市長はSとトポのそれぞれに、名前や年齢や身分を問いただした後で、Sに向き直ってこう切り出した。

--あなたは、思春期の頃からこの町に住む差異子という女性と文通なさっていらっしゃるんですね。

Sはまったく意外な質問にとまどったが、すぐに赤くなりうなづいた。

--そして、今回のこの旅行は、その差異子にあうためのものなのですね。

Sは顔をふせたままうなづいた。

--いえ、そんなに恥ずかしがることはありません。年老いた御両親や若く美しい婚約者を故郷に残したまま、わざわざこの遠い町へ差異子に会うためだけに来られたお気持ちは、私にも理解できなくはないと思います。しかし、お聞きしたいのは、何故あなたはこの町へ来て以来、一度もその差異子を捜し出そうとなされなかったのか、ということなのです。

Sは顔をあげると、それこそ重大な誤解であり、この誤解に比べればその他の細々とした行き違いなどはまったく取るに足りないものであると答えた。

--私は何度か差異子の家を捜しに出かけたのです。幸い住所は記憶していたものですから。ところが、そうして差異子の家へ向かうといつも決まって海へ出てしまうのです。きっと私がインサイドステップで歩いているからなのでしょう。

Sがこう打ち明けると、市長はそんな事で気を落とさずにこれからも根気良く捜し続けなさい。この町では、意志の力が何ものにもまして勝利を収めるのですと激励した。

それで終わりだった。気がすんだ市長は晴れ晴れとした顔つきで、テーブルの上に置かれたカップの白い液体を二人に勧めながら自分もうまそうに飲んだ。Sもトポもそれに口をつけようとしてやめた。腐敗した波魚の臭いがしたからだ。市長は不審そうに、飲まないのかねと尋ね、二人がうなづくと、失礼と言ってそれも飲み干した。それから、口の端に白い涎を垂らしながら、心配事があるのですと、窓を開けて空を指さす。



--ごらんなさい。この空の色は妙です。解釈虫さえ一匹もいないではありませんか。何か不吉なことが起こりそうだ。

Sは、無がすでに空全体を覆い尽くしてしまったことに気付いた。あのやわらかなボーイは死と青空との闘いに勝ったというわけだ。彼は今、この大空を支配する高みに至ったのだと、Sはそう悟った。

## 18

差異子の家を捜すために部屋を出て、新しいボーイの知らせた通りの道順をたどると海岸に到達する。

敷石の上には陽炎がゆらぎ、太陽は無数の太った光線を歪んだ大気の中へ放ち続けている。通りに面した建造物は、無限大の熱量によって溶解を始め、泡となって舞い上がり、海の方へと流されて行った。

通りの所々に白く乾燥した誤謬猫の骸が見られる。渦巻鳥は厚みが無く、急になめになると、空からゆるやかに舞い落ち路上に積もる。

潮の香りは静止し、嗅覚を刺激することも忘れている。老人は椅子に腰掛け、通りに眼差しを落としている。子供たちは群がってその視線を拾い集め、ポケットをふくらませて走り去って行く。

砂浜に打ち寄せる波は、互いに暗い秘密を囁きかわし、白い波頭の陰険な視線でSを盗み見ている。少し離れた沖合いでこの白い波頭を真似て耳を揺らせながら数えきれない誤謬猫が群れ泳いでいる。

Sは何度目かの失敗に重い足どりで、光へと戻り始めるのだった。

## 19

町の南端にある公園は海に向かって開かれていて、二三隻の輸送船が港に停泊しているのが見える。巨大な腕をくねらせて、クレーンが荷物を揺らしている。運転しているのは闇を背負った若い男だった。気がついてSに手を振って見せる。若者とは魯鈍でしばしば出会っていた。

--あなたは余所から来たという点で、この町の者とは違っているわけです。が、私はこの日に焼けた肌の色によってこの町の者と区別されるのです。

若者はそのことを気に病んでSに打ち明ける。

--いえ、人は彼が何を考えているかというただそれだけの事で他のすべての者と区別されます。故に、この町の者などというのは幻想に過ぎないのですが、またそれ故に、あなたも私も例外なくこの町の者であるとも言える訳です。

--あなたは物事を単純に考え過ぎています。たとえば、市長やそれに近い人々は私をトポスと呼びます。そしてそれ以外の町の者たちは親しみをこめてトポイと呼びます。結局、どこの国の言葉で呼ばれようと、多少数が変えられようと、私はこ

の町の者ではない人間の名前で呼ばれ続けるのです。これはいったいどういう罰なのでしょう。

## 20

『近くにある小学校の六年二組の教室へ行って御覧なさい。思いもつかない人物に会うことができるでしょう。それは差異子さんなのです』

これが市長の伝言だった。

Sもトポも市長が嘘をつくとは思えなかったので、混乱しながら学校へ向かった

。

校門を入ると低学年の子供たちが五色渡しで遊んでいた。地衣類の臭気が校庭に染みついていた。子供たちは、トポとSにわざとらしい無関心を示している。若い女教師に言いくるめられているのだ。

玄関では薄汚れたお地蔵様が親切に校長室を教えてくれた。

--一番北の校舎で数年前一人の子供が雪崩にあって死んだのです。

校長は悲しみに胸のネクタイを震わせていう。

--その子は毎日遅刻ばかりしていましたが、（校長は六年二組の教室へ二人を案内しながら物語り始めた）母思いのいい子だったのです。遅刻の理由というのも、毎朝母親の作ってくれる薬が、ひどく手間取るものだったからなのです。後で、その子が薬を一口も飲んでいなかったことが明らかになりました。その薬は致死性のある毒物だったのです。母親はそれを知らなかったのですが、その子は子供心にその間違いに気付いていながらその事実を母親に打ち明けることはできなかったのです。心のやさしい子だったのです。これまで何度も自分の息子を殺してきたのだなどと母親に告げることが、どうしてできるでしょう。ところがその日、特に薬の乾きが悪くて、その子はいつになく遅れて学校にやって来ました。十時を少しまわっていたと、あの玄関のお地蔵様が証言しています。

それから、あの子は一番北の校舎へ行ったのですが、その日はまったく記録的な寒さで、教室のほんの手前まで来たとき、ついにその子は寒さに倒れてしまったのです。それだけならば、校内を巡回している用務員の誰かがその子を発見し、命も取り留めたことでしょう。しかし、運悪くちょうどその時、二時間目の授業が終わったのです。生徒たちがいっせいに教室の扉を開け、廊下へ飛び出しました。雪が子供たちを熱狂させていたのです。そして、その子供達の発する熱のために雪がゆるみ雪崩となってあの子の死体が隠されてしまったのです。発見は遅れました。春になるまで待たなくてはなりませんでした。その間の私達や母親の心境はいかばかりのものだったでしょう。

発見されたとき、その子はまるで安らかに眠っているようでした。私はその子の死顔を今も忘れることができずにいるのです。

ここまで話した時、六年二組に辿りついた。そして不注意にも教室へ足を踏み入れた校長は、叫び声を一つ残して消え失せてしまった。教室のあった場所には完全

な空虚があるだけだったのだ。

Sとトポは、トイレの前で用を足して出て来た六年二組の教室と出会った。

--たぶん校長を失ったこの学校は、やがて消え去ってしまうでしょう。

Sの言葉を六年二組の教室は青ざめた顔で幾度も幾度も繰り返しつつぶやいていた

。

彼は自分のしでかした事の重大さに圧倒されてしまったのだ。六年二組の教室の額には深く消すことのできない印が刻みこみれた。

## 2 1

学校はみるみる消えていった。大勢の子供たちが校門から逃げ出してきた。通りに出ると子供たちは不意にちいさな蜘蛛に変化してしまいキイキイと鳴きながら駆けていかなければならない。

Sとトポは校門の横にたたずみそれを眺めていたのだが、そこに差異子が現われたのだ。

差異子は驚いた表情で二人をかわるがわる見つめた。解釈虫の飛び交う午後の大気は親友を見分けるのに適してはいなかった。

--わたしあなたが本当に実在するなんて夢にも思っていなかったわ。

差異子は弁解しながらトポに抱きつこうとした。ところがトポは怯えきってしまい、Sの陰に隠れて出て来ようとしなかった。トポにはまったく身に覚えの無い出来事だったのだ。

Sは微笑を浮かべながら、自分がSであり、差異子の歓迎はこの自分に向けられるべきものであると説明する。差異子はそれを冗談だと笑い真面目に受け取らなかったが、Sが髪を振り乱し大声でわめき主張するので、あるいはそうかも知れないわねと、まったく信じていない表情で答えた。

## 2 2

差異子は向上腺に障害があり、普段は病室で眠っていなくてはならない。

--向上腺って何なのかしら。わたし知らないの。

Sを試すかのような微笑を口許に浮かべて、差異子は言う。

差異子は青い不透明な液体をカップから口に移す。喉が喜びにふるえて歌を歌う。しかし、その向こうで無に向かって開かれた窓がSを戸惑わせていた。

--健康であることは基本的です。まして、この町ではそれなしでは生きられないでしょう。

## 2 3

海の波によって狂ってしまった時計を、町の時計店約束へ持って行くと、時計工はこんな時計はみたことがない。こんな仕組では、正確な時は捕らえられないと言って、新しい時計を勧めた。

店を出るとその時計はありふれた巻き貝に変わっていた。

## 24

町に猫の頭をした通行人がふえていた。無が町を侵蝕しているのだ。市長は心を痛めている。

--これでは秩序というものが保たれません。市長室では、大半の家具類が無に包まれてゆらめいていた。

## 25

差異子は会う度に別人のように見えた。Sの意見にトポもおずおずと賛同の意を示す。

ある時は、年端もゆかない少女にしか見えないのだが、別のある時には、まるで死にかけている老婆なのだ。たいていは、若い女のように見える。しかし、その顔つき、話し方、身振りの癖などは、毎日別人としか思えない。ただ、Sにもトポにもそれらがすべて別人であるという確信が持てないのだ。そういった印象は最初の数分だけであり、十分もすると差異子のイメージは確固としたものになり、それ以外の差異子など想像できなくなってしまう。さらに、別れた後ではいかなる差異子をも回想することが不可能になる。

この町の女はみんな差異子なのではないかとトポは冗談のように話すのだが、Sにはそれがそう見当はずれとも思えない。差異子とはそういった感覚を覚えさせる質の女なのだということに、結局話は落ち着くのだが。

## 26

トポの友人に招かれて三人は出かけた。

森では、光の届かない暗黒がそこそこに待ち受けている。夢読樹の枝はSとトポと差異子の肩をかわるがわる咎めるように打ち、警告を続けていたが、三人にはその意味が分からなかった。

森の中では、恋人たちが愛について哲学的な議論を闘わせていた。熱情が夢読樹を育てるのだ。恋人たちは近くの仲間に向かって計算し尽くされた声をあげる。互いに励ましあっているのだらう。

家に帰る時間は森の中には存在しない。忘れるための川などどこにもないという

のに。

--あまり知られていないのですが、この町には二つの言葉があります。それぞれ男と女によって使われており、そのために男と女とでは互いに意志を通じ合うことができない程、二つの言語は異なっています。それは、この町の男と女の思考の形がまったく異なっているというだけのことなのですが。

ただ残念なことに、この言語の障壁は日常生活にとってあまりにも不便なものでしたから、今では余所の言葉によって話すことが習慣になっています。

恋人たちだけが、この町の言葉を使います。彼等は言葉によって愛しあうのですから。

トポの友人あるは家の中へ三人をおしやりながら、そう語った。

あるの妻はつま、息子はむすこという名前であり、Sと差異子は彼等を、あるつま、あるむすこと呼んだ。家族はそれをひどくおかしがり、互いにそのように呼びあつて笑った。

## 27

あるは時の結晶を三人に見せようかと言った。

ビーカーの中では、細い糸にまといつく時の結晶が、未来の太陽の光を屈折させ、淡い小さな虹をいくつも作り出していた。

--注意を怠ると、たちまち解釈虫が結晶に群がって食い荒らしてしまうのです。私はそのために、一つまみの塩をふっておきます。秘訣はそんなところにあるのですよ。

確かに部屋の中にはそこかしこに解釈虫が浮遊していたが、結晶のあたりには一匹もいなかった。

時の結晶は、口に頬張るとすべての記憶と未来を取り戻す。三人がそれを口に放り込んだとき、差異子の体が透明になった。

帰り道では、気まずさのために何も言葉を交わすことはなかった。

## 28

猫の頭をした通行人と魔法使い、それに白痴以外に通りを歩く者がなくなった。残り的人々は家の中でテレビに釘付けにされているのだ。手足に打ち込まれた暴力にあげる苦痛のうめき声は、通りを歩いていてさえ聞き取ることができる。だから、通行人たちは両手で耳を押さえながら、風のように駆け抜けて行く。

## 29

市長は市長室の扉の前でSとトポを迎えた。すでに部屋は無の中に沈んでいる。

--天文台の台長が抽象島行きを願い出たのです。

市長は不安そうな表情でSに語り、トポに目配せする。

--天文台の台長にはお会いになったでしょう。台長は年老いた擬似ねずみで長く務めて来たのですが、最近、町の上空が無に変質してしまい、観測が思うようにいかないのだそうです。

--それで抽象島へ。

--そうです。あそこは大気が希薄で、天文学者には極めて理想的な場所なのだと言っています。

--台長の情熱は研究に捧げられているのですね。

--彼は偉大です。故に彼は自由なのです。何者も彼をとどめることはできません。私と彼とは古い友人なのです。

Sとトポは市長代理の仕事を引き受けることを快く承知した。

--しかし、恨まないで下さい。これは義務なのですから。

と言いつけることは忘れなかった。

### 30

差異子はすでに一週間というもの何も食べていなかった。子供ができたのだわとSに打ち明け、熱い視線をトポに送る。

--女の子よきつと。

### 31

差異子は記念のためにと町の地図を作る計画を立てるのだが、いつまでも描き始めようとはしなかった。描こうとすると、描くことを忘れてしまうのだという。トポも試みたり、Sもやってみようとしたが、それは不可能だという結論に達した。

差異子は町の地図（トポは町の地図には興味を持っていなかったのだ）と新鮮な魚類を手に入れるために町へ買い物に出かけ、Sとトポは新しい船の設計に取りかかった。

優秀な計算技師でもあるトポは、胸のポケットに二色のボールペン、尻のポケットには計算用紙の束をいつも忘れない。

--たぶん私の計算では、（これはすでに三回と半分、検算を繰り返したもののなのですが）存在それ自体が前進であるような船が、造りだせるでしょう。

トポは自信に満ちた笑顔をSに向ける。

しばらくの間に痩せ細った支配人は、部屋の戸口で影のように壁によりかかり、二人の作業をながめていた。何か言いたいことがあるのかとSが声をかけると、支配人は喉をつまらせながら、話し始めた。

--お仕事の邪魔をするつもりはないのです。ただ、あなた方が底知れぬ情熱を傾けて働かれているのを目にすると、現在のこの町の危機さえ信じられなくなってしまふのです。

--危機ですって。

--御存知なかったのですね。今、町は徐々に消滅しつつあるのです。いつの間にか大空を飲み込んでしまった無が、この町を蝕み続けているのです。

学校、市長室、公園などから始まったこの町の消失は、今では魯鈍、食料品店、森を中心に町の過半数の道路を飲み込むまでに至っています。

私は妻や数多くの友人たちを失いました。私にはこれ以上失うものがないのです。それでここにやってきました。

私は復讐のために来たのです。私だけがこの破滅の張本人を知っています。S。あなたは何故、あの日あのやわらかなボーイを死なせたのでしょうか。こうなることは分かっていたのに。

だが、今となってはそれもどうでもいい事です。私はあなたを殺すために来たのだから。

支配人はポケットから回想消しを取り出すと、ふるえる手つきでSにノズルを向けた。それからレバーを引こうとした時、目の中で回転していた解釈虫に視線を遮られ支配人の目測が狂った。一瞬で事足りた。横合いからトポが回想消しを叩き落としたのだ。ノズルから飛び出した気泡はSをそれ、壁の一部に付着しそこを無に変えた。

--こんなことをしては君はもう助からないね。

トポは憐れみをこめてそう言った。

--市長代理にノズルを向けるなんて。

支配人は顔を硬直させると、消耗して凹んだ頭を揺らせながら力なく立ち上がった。

遠ざかるにつれて、支配人の体は透明になり、町の無の領域の中へ、前のめりに倒れ消えてしまった。

差異子が町で急に倒れたという知らせを受けて、Sとトポは病院へ向かった。病室のベッドに小さくなって眠っていたのは、見知らぬ女だったが、二人はそれ

には気付かないふりをして名前を呼んだ。やがて女は醒めると、二人を『わたしのいとしいひとたち』と呼んで陽気に笑った。

--向上腺というものは思ったよりも重要なものだったのだわ。

--最も重要なものこそ、見落とされることが多いのです。

女はSの言葉に安心して再び眠り始めた。

### 34

医者は差異子の子供たちを二人に紹介した。子供は一卵性双生児で、凝子とLと名づけられていた。医者はにんまりと笑うと、子供たちを空中に放り上げお手玉を始め、二人の名前を混乱させた。Sとトポは、咄嗟に子供たちを奪いとると、立ち上がれなくなるまで医者をおきのめしたが、二人にはもはや子供たちの内、どちらが凝子でどちらがLであるのか見分けることはできなかった。

--おそらく私達が（と、Sはトポに自分の心配を説明しはじめる）この子供たちを正確に呼んだり誤って呼んだりすることによって、この子供たちは自分が凝子なのかLなのか理解できなくなるでしょう。

--そうです。この子供たち自身にそれがわからなくなったとき、私たち、いや誰がこの子供たちを区別できるものでしょうか。

そのとき、二人はその区別を支配しうる唯一の人物に気付いた。二人は同じ姿勢で差異子をみつめた。

見知らぬ女は、このときにはもう完全な差異子に変化し、二人の娘の母親の横顔で静かな寝息をたてていた。

### 35

船が岸に着けられた。

Sとトポは船から降りると、並んで岸に座り込み計算を始めた。試運転は失敗だった。浮力と速度が憎しみ合っていて、船は憂鬱症にとりつかれてしまったのだ。

--重ければ重い程速くなる。

--重ければ重い程沈んでしまう。

Sとトポが問題点を口にすると、第三の声が続けた。

--速くなれば速くなる程軽くなり、軽ければ軽い程浮き上がり、浮けば浮く程、重くなります。

二人が振り向くと、それはクレーンを巧みに操る青年だった。

--私は、浮力と速度に関する新しい理論によって学位を得たのです。私を仲間に加えていただければ、お力になれると思うのですが。

彼はそう言い、二人はそろって手を差し出した。



無のために港の関係者がすべて猫の頭になってしまい、どうしても猫の頭になれなかった彼だけが失業したのだという。

--やはり、船の設計の方が私には似合っているようです。

彼は魚のように口をぱくぱくさせて言う。

### 36

台長が出発した。

Sとトポと青年の造った高速船は、市長から台長へとうやうやしく贈呈された。猫の頭をした町中の人々が見送りに来ていた。魔法使いたちは青空に夢と希望を描こうとしたのだが、青空にはすでに無しかなく、彼等は爪を噛みながら家へ帰らなくてはならなかった。子供たちがその後ろから石を投げつけ追って行ったが、いつものように姿を見失い港に戻って来た。

船と陸を無数のテープが結んだ。それから、火が放たれ、燃え上がった紙テープは散り散りになって舞い飛んだ。港に詰めかけた無数の猫の頭が、重なりあいゆれていた。誰も口をきくものはいなかった。

台長の額が複雑な思考のために新しい皺を刻んだ。

船は港を離れた。

胸に頭を垂れていた市長は、船が小さくなるにつれて縮んでゆき、水平線が船を沈めた時、消えた。

### 37

台長の出発の知らせを受けると、差異子はうつろな視線に言葉をからませて言った。

--あなた方五人は陸伝いに抽象島へ行けるでしょう。

--なぜ、台長を追わなくてはならないのですか。

トポが最後の問いを口にする時、差異子はいたずらをしでかした子供に諭すように、溜息をひとつついてから話した。

--それは、差異子に会うためです。

Sとトポはさらに説明を求めるためにその女をみつめた。

--わたしは差異子ではありません。

差異子はこの町ではあなた方とお会いしたくなかったのです。少なくとも、あなた方と対等の立場に立ってお会いしたかったのでしょう。そのために、彼女は台長と共に故郷を捨て、抽象島へ向かいました。

彼女は待っています。お急ぎなさい。

向上腺がそのとき破裂した。

Sとトポは凝子とLの手をひいて町へ出た。町には人影もなく、夥しい数の解釈虫の死骸が道路の上、屋根の上、広場の上にうずたかく積もり、青白く発光していた。

足音を忍ばせて、浮力と速度に関する青年が近づいて来た。

--私が抽象島まで御案内します。

三人は再会を祝福し合うと横に並び、間に凝子とLを挟んで手を繋ぎ、聞きなれない歌を歌いながら山へ向かった。

解釈虫の骸の層に足首まで埋まりながら前進する彼等の頭上には見られることを拒絶する無が果てしなく拡っていた。

いくつかの曲がり角を抜けると、黒い僧衣をまとった猫の頭の行列が彼等の方へ向かって来た。毛むくじゃらの顔の中央に裸の鼻があった。禁欲生活に痩せた頬に、口をつぐみ、目は半ば閉じ、何も見てはいなかった。行列は五人に注意を向けることなく歩いていった。その前方には町を蝕み続ける無が待ち受けていた。行列が無の中に入り込むのを見届ける前に、五人はまた曲がり角を曲がった。

山に入ると、道は絶望のリズムでたわみ、登り方さえ容易に間違い始めるので、彼等は三度もやり直さなければならなかった。

駅のある丘に登り着いた時、町の最後の建築物、時計店約束が無の中に失われた。海はその二つの縁を無に接していたが、かつて町のあった空間には底知れぬ海の断面をさらけ出していた。しかし、彼等は無に隔てられていて、海を長く見つめ続けることはできなかった。

列車はそれから一時間後に出発した。